

パッション尺度日本語版の作成 および信頼性・妥当性の検討¹

久保 尊洋² 沢宮 容子 筑波大学

Reliability and validity of the Japanese version of the Passion Scale

Takahiro Kubo and Yoko Sawamiya (University of Tsukuba)

Passion is defined as a strong inclination toward an activity that one likes, that one finds important, and in which one invests time and energy. These activities are eventually internalized as part of one's identity. The Dualistic Model of Passion posits the existence of two types of passion - harmonious and obsessive passion (Vallerand et al., 2003; Vallerand, 2015). These two types of passion have been assessed through the Passion Scale (Marsh et al., 2013). The purpose of the present study was to develop a Japanese version of the Passion Scale and to evaluate its reliability and validity. In Study 1, Japanese university students completed a questionnaire that examined the relationship between the Passion Scale and measures of flow, concentration, anxiety, shame, depression, well-being and positive and negative affect. In Study 2, we examined the test-retest reliability. The results provided support for the two-factor structure of the Japanese Passion Scale and showed high reliability and validity. Overall, this evidence supports the practical applicability of the Japanese Passion Scale.

Key words: passion, motivation, well-being.

The Japanese Journal of Psychology

2018, Vol. 89, No. 5, pp. 490-499

J-STAGE Advanced published date: September 20, 2018, doi.org/10.4992/jjpsy.89.17205

パッションは、特定の活動などに対して向けられる強い意向 (strong inclination) である (Vallerand et al., 2003)。パッションは、特定の活動などに対して、(a) 愛を抱き、(b) 価値を見出し、(c) 多くの時間やエネルギーを費やし、(d) その活動がアイデンティティの一部に内在化されることで生じるとされる。(a)–(d) は、それぞれ動機づけを生じさせる要因であり、それらがパッションを形成していると考えられている。

パッションについての主たる理論が、パッションの二元モデル (Vallerand et al., 2003; Vallerand, 2015) である。同理論によれば、パッションには統制力を備えた調和性パッション (harmonious passion) と統制力のない強迫性パッション (obsessive passion) の2側面が存在するという。この2側面は、自己決定理論 (Deci & Ryan, 2000) と一致しており、パッションは内在化過程において、自律性の違いにより生じるものであることが指摘されている。

自律的な内在化では調和性パッションが生じ、特定の活動への欲求をコントロールすることができるので、他の活動や生活の一部にうまく組み込まれることで、その活動への持続的な取り組みを可能にする。そのため、調和性パッションでは、適応的な結果が生じやすいと考えられている。例えば、調和性パッションは well-being の高さに関連している (Carpentier, Mageau, & Vallerand, 2012; Rousseau & Vallerand, 2008; Vallerand et al., 2008)。また、調和性パッションが高い群、強迫性パッションが高い群、パッションをもたな

Correspondence concerning this article should be sent to: Takahiro Kubo, Doctoral Program in Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572, Japan. (E-mail: songyou312@gmail.com)

¹ 本研究は、平成 28 年度筑波大学大学院人間総合科学研究科修士論文の一部の内容を加筆、修正したものである。

² パッション尺度の日本語訳の作成にあたり、Prof. Robert J. Vallerand (The Université du Québec à Montréal) より邦訳の許可と貴重なご助言をいただきました。また、バックトランスレーションの際には宇野 カオリ先生 (筑波大学) にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

い群の well-being を比較したところ、調和性パッションが高い群は他の群に比べて有意に well-being が高かったという研究結果もある (Philippe, Vallerand, & Lavigne, 2009)。調和性パッションが well-being の高さに関連を示している理由としては、調和性パッションが、活動をしている時のポジティブ感情 (Carbonneau, Vallerand, & Massicotte, 2010; Lafrenière, Vallerand, Donahue, & Lavigne, 2009) や、フロー (Carpentier et al., 2012; Lavigne & Forest, 2012; Ratelle, Vallerand, Mageau, Rousseau, & Provencher, 2004)、集中 (Vallerand et al., 2003)、さらに活動後のポジティブ感情 (Mageau, Vallerand, Rousseau, Ratelle, & Provencher, 2005; Stenseng, Rise, & Kraft, 2011) の高さや、活動後のネガティブ感情の低さ (Stenseng et al., 2011) と関連していることが挙げられる。

一方、他律的な内在化では強迫性パッションが生じ、特定の活動への欲求をコントロールすることができないので、他の活動や生活の一部との葛藤を引き起こし、その活動への頑固な執着を生じさせる。そのため、強迫性パッションでは非適応的な結果が生じやすいと考えられている。例えば、強迫性パッションは、well-being の低さと関連している (Carpentier et al., 2012)。強迫性パッションが、well-being の低さと関連している理由としては、活動をしている時のネガティブ感情 (Carbonneau et al., 2010) や、ネガティブ感情の中の恥 (Vallerand et al., 2003) や不安 (Mageau et al., 2005) の高さ、及び活動が阻害された時のネガティブ感情 (Stoeber, Harvey, Ward, & Childs, 2011) の高さとも関連していることが挙げられる。

パッションの経時的特性については、比較的安定したものであることが、これまでの研究で示されている。Vallerand (2010) は、「調和性パッションと強迫性パッションの時間的安定性は中程度であり、変化と変動の余地があるものの、比較的安定したものである」と指摘している。また、Rousseau, Vallerand, Ratelle, Mageau, & Provencher (2002) が約 1 ヶ月の 2 時点調査を行ったところ、調和性パッションと強迫性パッションの再検査信頼性の数値は、それぞれ $r = .89$, $r = .84$ であった。さらに、Carbonneau, Vallerand, Fernet, & Guay (2008) が 3 ヶ月の 2 時点調査を行ったところ、同様に再検査信頼性の数値は、それぞれ $r = .80$, $r = .88$ であった。

また、Vallerand (2013) は、パッションが、心理的な well-being だけでなく、身体的健康や、対人関係、パフォーマンス、社会への貢献に影響を与えることを指摘している。つまり、パッションは、個人のメンタルヘルスの維持・向上に役立つばかりでなく、個人を取り巻く人間関係をより良くし、さらには社会に対する生産性を促進するなど、個人を介した社会への貢献にも役立つという重要な意義をもつ。

しかし、我が国ではパッションの二元モデルに基づ

く研究はほとんど行われてこなかった。その理由としては、パッションを量的に測定する実用可能な心理尺度が存在しなかったことが理由として挙げられる。そこで本研究では、調和性パッションと強迫性パッションの二次元を測定するパッション尺度を作成することを目的とする。

本研究で検討する Passion Scale (Vallerand et al., 2003; Marsh et al., 2013) は、パッションの強さを測定するパッション基準と、パッションの状態である調和性パッションと強迫性パッションを測定する尺度である。パッション基準は、活動に対する動機づけとなる前出 (a) — (d) の要素に基づく項目であり、パッションが生じているかを判定するための項目になっている。このパッション基準の各項目と 2 つのパッションとの間にはそれぞれ正の相関がみられる (Marsh et al., 2013)。先行研究 (Vallerand & Houffort, 2003) では、このパッションの基準の平均値が 4 以下のサンプルはパッションが生じていないとみなしている。つまり、この基準を満たすことによって、パッションが生じていることを判断し、その上で、調和性パッションと強迫性パッションを測定することを可能にしている。

Passion Scale は、様々な活動についてのパッションを測定できる。Vallerand et al. (2003) では、パッションを向ける活動を特定せずに、大学生に対し自由記述で調査を行い、活動を 7 つのカテゴリに分類している。結果、個人スポーツ/身体活動 (Individual sports / physical activity) が 34.85%、集団スポーツ (Team sports) が 25.54%、受身的余暇 (Passive leisure) が 15.05%、音楽 (Active music) が 10.01%、読書 (Reading) が 4.95%、芸術 (Active arts) が 3.96%、仕事/教育 (Work/education) が 1.98% であることが示されている。

Vallerand et al. (2003) によって作成された原版の Passion Scale は、調和性パッション 7 項目、強迫性パッション 7 項目からなっており、パッション基準は 6 項目が用いられている。原版を基に、イタリア版 (Zito & Colombo, 2017)、ポルトガル版 (Gonçalves, Ramos, Ferrão, & Parreira, 2014)、日本版 (Hatori, Ishimura, Ichimura, & Koganei, 2013) の翻訳版が作成された。

しかし、原版にはパッションによって引き起こされる結果に該当するような項目が存在しており (Vallerand et al., 2003)、内容的妥当性に課題があった。Vallerand (2010) はこれらの項目を除外・修正し、修正版 Passion Scale を作成し、Marsh et al. (2013) はその信頼性・妥当性を検討した。修正版 Passion Scale (Marsh et al., 2013) は調和性パッション 6 項目、強迫性パッション 6 項目からなっており、パッション基準 4 項目が使用されたが、後に 1 項目が追加され現在は 5 項目となっている (Vallerand, 2015)。修正版 (Marsh et al., 2013) を基にし、パッション基準 5 項目を用いた翻訳版の尺度は、スペイン版 (Chamarro et al.,

2015)、中国版 (Zhao, St-Louis, & Vallerand, 2015) などがあるが、我が国では翻訳版は作成されていなかった。本研究では、パッション基準 5 項目を含めた 17 項目からなる修正版 Passion Scale (Marsh et al., 2013) の日本語版 (以下、パッション尺度日本語版とする) を作成し、信頼性と妥当性の検討を行う。

尺度の信頼性については、内的一貫性と時間的安定性を確認する。本研究では、Ratelle, Carboneau, Vallerand, & Mageau (2013) に倣い、3 週間間隔での検討を行う。また尺度の妥当性については、まず、探索的因子分析によって原版と同じ因子構造になるかを確認した後、確認的因子分析によって、その因子モデルの適合度について検討を行い、尺度の構造的な側面について確認を行う。

基準関連妥当性の検討については、中国版 (Zhao et al., 2015) では、ポジティブ感情、ネガティブ感情、フロー、well-being についてのみ検討を行っている。しかし、原版 (Vallerand et al., 2003) では、パッションの二次元性の測定をするために、ポジティブ感情、ネガティブ感情、ネガティブな認知、不安、恥、フロー、集中、など、複数の変数との関連について検討している。本研究では、これらの概念について我が国で測定可能な尺度が存在していることを条件に、原版で測定されているポジティブ感情、ネガティブ感情、不安、恥、フロー、集中と、中国版で測定されている well-being について検討する。このうち、ポジティブ感情とネガティブ感情については、原版の妥当性検討を参考に、「活動中」、「活動後」、「活動が阻害された時」の条件を教示によって設定する。加えて、well-being などの正の側面だけでなく、不適応に関わる負の側面の変数も必要であると考え、抑うつについても測定する。

調和性パッションは、適応的な結果を導き、葛藤などネガティブな体験を抑制することから、活動中と活動後のポジティブ感情、フロー、集中、well-being と正の相関を示し、ネガティブ感情、抑うつと負の相関を示すことが予想される。一方、強迫性パッションでは、逆に葛藤などが生じやすいことから、活動中と活動が阻害された時のネガティブ感情、不安、恥、抑うつと正の関連を示すことが予想される。

さらに、パッションを向ける活動内容によって、調和性パッションと強迫性パッションの高さに違いが生じるかどうかについても検討を行う。加えて、パッションを向ける活動の選択に男女差が存在するかについても同時に検討する。

研究 1

研究 1 では、パッション尺度日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討を目的として大学生に対して質問紙調査を行った。

方法

パッション尺度日本語版の作成 原尺度は、Vallerand et al. (2003) が作成し、Vallerand (2010) によって修正された Passion Scale である。調和性パッションの 6 項目、強迫性パッションの 6 項目、パッション基準の 5 項目の計 17 項目からなり、十分な信頼性・妥当性が報告されている (Marsh et al., 2013)。日本語版の作成にあたっては、原著者の Vallerand の許可を得た。翻訳を職業とする専門家 4 名 (英語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名、および日本語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名) に依頼し、原尺度の項目を日本語に翻訳した。日本語訳の結果を踏まえ、心理学を専門とする大学教員 2 名 (このうち 1 名は日英のバイリンガル)、および大学院生 3 名が表現の統一などを協議した。次に、前述の 4 名の翻訳家とは別の翻訳家 4 名 (英語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名、および日本語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名) にバックトランスレーションを依頼した。その後、先ほどの 5 名で、原版と項目内容が等しいか検討を行った。その結果、1 項目の項目内容が原版と異なると判断された。この 1 項目について、さらに原著者に表現や内容について確認した後、日本語訳を修正した。再度、前回依頼した翻訳家とは別の翻訳家 4 名 (英語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名、および日本語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名) に依頼し、同様の手続きでバックトランスレーションを行い、結果を原著者に送り、十分な等質性を得られたことを確認し、パッション尺度日本語版を作成した。

本研究では、最初に「あなたが好きな活動で、それが重要であって、かつ、多くの時間を費やしているものについて記述してください」という教示を示し、回答者には、活動について、自由記述を求めた。そして、その活動についての、1 週間当たりの活動時間と、これまでの活動経験年数について自由記述を求めた。そして、その活動を思い浮かべながらパッション尺度日本語版の項目へ回答を求めた。パッション尺度日本語版の下位尺度のうち、調和性パッションは「この活動は、私の生活の中にうまく組み込まれている」などの 6 項目から、強迫性パッションは「この活動をしたという衝動をコントロールすることは難しい」などの 6 項目から構成されていた。また、パッション基準は、「この活動に多くの時間を費やしている」などの 5 項目から構成されていた。

参加者 国立大学 3 校、私立大学 4 校の大学生 664 名に対し質問紙調査を行った。パッションを向ける活動を記述していないにもかかわらずパッション尺度に回答しているサンプルや、一様に回答しているサンプルを分析から外した 611 名のうち、Vallerand & Houliort (2003) を参考に、パッション尺度日本語版のパッシ

Table 1
パッションを向けた活動内容の分類

活動内容	%
個人スポーツ（ジョギング、サイクリング、水泳など）	4.5
集団スポーツ（サッカー、バスケットボール、テニスなど）	9.3
受身的余暇（映画を見る、音楽を聴くなど）	30.9
音楽活動をする（ギターを弾く、ピアノを弾くなど）	9.8
読書（読書、漫画を読む、小説を読むなど）	11.4
芸術（絵を描く、写真を撮るなど）	9.4
仕事/学業（アルバイト、自分の専門の勉強など）	1.4
対人関係（友達や家族と一緒にいるなど）	3.5
その他（食べること、料理など）	19.7

ン基準（5項目7件法）の合計得点を算出し、平均4以下の値のサンプルは除外した。最終的に508名（男性168名、女性338名、不明2名、平均年齢19.5±2.82歳）を分析対象者とした。なお、パッション基準の平均4より大きい値を示したサンプルは、全体の83.1%だった。また、パッションを向けた活動の平均活動年数は8.19年、1週間の平均活動時間は13.6時間だった。パッションを向けた活動について自由記述で回答したものは、原版（Vallerand et al., 2003）を参考にした分類を基に、第1著者と心理学専攻の大学院生1名が独立して分類を行った。分類の評定者間の一致率は、94.70%だった。評定者間で一致しなかった項目については、討議により再分類を行った。各分類の割合はTable 1に示す。

手続き 調査は2016年6月から7月に実施した。授業担当者の同意を得た後、授業の前後などを用いて調査を行った。倫理的配慮として、無記名式で行い、調査時には、調査への回答は任意であること、目的や個人情報保護など研究の趣旨や守秘義務についての説明を行った。なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会による審査によって承認を受けた。

調査内容 パッションを測定する尺度と、基準関連妥当性を検討するための尺度は以下の通りである。

パッションの測定には、上記の手続きを経て作成したパッション尺度日本語版を用いた。評定は「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」の7段階評定法で行った。

ポジティブ感情とネガティブ感情の測定には、日本語版 Positive and Negative Affect Schedule（以下、日本語版 PANAS とする）（佐藤・安田, 2001）のポジティブ感情8項目、ネガティブ感情8項目、計16項目を使用した。評定は「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」の7段階評定法で行った。パッション尺度日本語版で記述した活動について、活動中、活

動後、活動が阻害された時の感情状態について回答を求めた。感情状態の測定には、Vallerand et al. (2003) を参考に、「好きな活動をしている時（活動中）」、「好きな活動を終えた後（活動後）」、「好きな活動が妨げられた時（活動が阻害された時）」という教示を示し、回答を求めた。なお、Vallerand et al. (2003) に倣い、活動後と活動が阻害された時の教示を加えた尺度は同時に使用せずに別のサンプルに対して使用した。

フローの測定には、フロー体験チェックリスト（石村, 2014）の没入4項目、自信4項目、挑戦2項目の計10項目を使用した。評定は「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」の7段階評定法で行った。パッション尺度日本語版で記述した活動について、活動中のフロー体験について回答を求めた。

恥の測定には、樋口（2000）で析出された恥の測定項目23項目を使用した。評定は「感じない」から「非常に感じる」の4段階評定法で行った。

不安の測定には、状態-特性不安尺度（清水・今栄, 1981）の状態の20項目を使用した。評定は、「まったくそうでない」から「そうである」の4段階評定法で行った。パッション尺度日本語版で記述した活動について、活動中の不安状態について回答を求めた。

集中の測定には、多面的感情状態尺度（寺崎・岸本・古賀, 1992）のうち、集中の10項目を使用した。評定は、「全く感じていない」から「はっきり感じている」の4段階評定法で行った。パッション尺度日本語版で記述した活動について、活動中の集中について回答を求めた。

抑うつ状態の測定には、ベック抑うつ尺度の日本語版（林・瀧本, 1991）の21項目を使用した。評定は4段階評定で行った。最近の抑うつ状態について回答を求めた。

well-being の測定には、Satisfaction With Life Scale 日本語版（大石, 2009）の計5項目を使用した。評定は、「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」の7段階評定で行った。現在の well-being について回答を求めた。

結果と考察

以下、データの統計処理はSPSS および Amos によって行われた。分析の際の欠損値の処理方法については、パッション尺度日本語版の因子分析ではリストワイズ法、そのほかの分析では、ペアワイズ法によって分析を行った。

分析に先立ち、パッション尺度日本語版の調和性パッションと強迫性パッションの12項目について、項目の得点分布状況を確認した。1つの選択肢に対して70%以上の分析対象者が回答した項目は見当たらなかったため、パッション尺度日本語版12項目をそのまま分析に使用した。

Table 2
 パッション尺度日本語版の因子分析の結果ならびに基礎統計量

項目	因子		M	SD
	I	II		
I. 強迫性パッション ($\alpha = .81$)				
12. この活動に支配されているような印象がある。 (I have the impression that my activity controls me.)	.79	-.17	3.25	2.15
9. できることなら, この活動だけをしていたい。 (If I could, I would only do my activity.)	.65	.03	3.58	2.24
4. この活動に対して, 執着心に近い感覚を持っている。 (I have almost an obsessive feeling for this activity.)	.65	.09	4.48	1.94
11. この活動にわくわくしすぎて, 時々我を忘れてしまうほどだ。 (This activity is so exciting that I sometimes lose control over it.)	.64	.05	4.20	2.03
2. この活動をしたいという衝動をコントロールすることは難しい。 (I have difficulties controlling my urge to do my activity.)	.58	-.02	3.86	2.01
7. この活動だけが, 私を夢中にさせる唯一のものだ。 (This activity is the only thing that really turns me on.)	.57	.12	2.96	2.01
II. 調和性パッション ($\alpha = .80$)				
10. この活動は, 私の他の生活の一部と調和している。 (My activity is in harmony with other things that are part of me.)	.03	.76	4.76	1.74
8. この活動は, 私の生活の中にうまく組み込まれている。 (My activity is well integrated in my life.)	-.05	.75	4.96	1.74
1. この活動は, 私の生活の中の他の活動と調和している。 (This activity is in harmony with the other activities in my life.)	-.11	.75	4.81	1.85
6. この活動は, 多様な経験を可能にさせてくれる。 (This activity allows me to live a variety of experiences.)	.04	.51	4.98	1.85
3. この活動での新たな発見によって, この活動がより価値のあるものだと思う。 (The new things that I discover with this activity allow me to appreciate it even more.)	.11	.48	5.24	1.72
5. この活動は, 自分の良いところを反映している。 (This activity reflects the qualities I like about myself.)	.09	.47	4.18	1.88
II 因子との相関				
	.24			
累積寄与率				
	26.78	43.58		

注) $N = 495$ 。

因子構造の検討 パッション尺度日本語版の 12 項目について, 主因子法による因子分析を行った。その結果, 固有値の減衰状況 (3.78, 2.42, 1.184, .865, …), 因子解釈可能性から 2 因子構造が妥当であると判断した。さらに, 因子数を 2 に設定し, 再度, 最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果, すべての項目において, 1 つの因子に .40 以上の因子負荷量を示していた。パッション基準を除くパッション尺度日本語版の 12 項目は, 修正版と同じ 2 因子構造を示し, 因子 I は強迫性パッションの項目, 因子 II は調和性パッションの項目で構成されていた。因子分析の結果を Table 2 に示す。

次に, 確認的因子分析の結果, 項目間に誤差相関を

設定しないモデルでは, 適合度が低かった ($CFI = .826$, $TLI = .784$, $RMSEA = .113$)。そこで, 同一内容を測定していると考えられる項目 1 と項目 8, 項目 1 と項目 10, 項目 8 と項目 10, 項目 7 と項目 9 との間に誤差相関をそれぞれ設定し, 確認的因子分析を再度行った。その結果, 各適合度指標は概ね許容範囲を示した ($CFI = .928$, $TLI = .903$, $RMSEA = .075$)。

Marsh et al. (2013) が行った確認的因子分析のモデルの適合度や ($CFI = .919$, $TLI = .896$, $RMSEA = .075$), Zhao et al. (2015) のモデルの適合度 ($CFI = .939$, $TLI = .921$, $RMSEA = .069$) と比較しても, 本研究で得られた適合度の値は十分なものであると判断できる。

また, 誤差相関が生じた理由については, 選択され

るパッションを向ける活動の違いが影響している可能性も考えられる。しかし、類似した項目について Marsh et al. (2013) では、項目1と項目8、項目7と項目9の間に誤差相関を想定し、Zhao et al. (2015) においても項目1と項目10、項目7と項目9の間に誤差相関を設定したモデルについて検討し、それぞれ誤差相関を設定したモデルを妥当なものとしている。選択される活動のどのような要因が誤差相関の高さに影響しているか今後検討していく必要はあるものの、本研究で設定した誤差相関を含めたモデルは妥当なものであると判断した。

性差 パッション尺度日本語版の男女差について検討した。調和性パッションについては、男性 ($M = 4.74$, $SD = 1.33$) と女性 ($M = 4.87$, $SD = 1.24$) で有意差はみられなかった ($t(495) = 1.08$, ns)。強迫性パッションについても男性 ($M = 3.64$, $SD = 1.41$) と女性 ($M = 3.76$, $SD = 1.51$) で有意差はみられなかった ($t(499) = 0.86$, ns)。Marsh et al. (2013) によって行われた検討においても性差は確認されておらず、先行研究と一致する結果となった。

活動内容の差 パッション尺度日本語版の調和性パッションと強迫性パッションについて、Table 1の活動内容ごとにそれぞれの値の平均値を算出し、9群間の平均値の差の検定を行った。検定の結果、調和性パッションについて、5%水準で有意な差がみられ ($F(8, 490) = 3.51$, $p < .05$)、Tukey HSD法の多重比較の結果、「読書」にパッションを向ける群よりも、「集団スポーツ」や「芸術」、「対人関係」にパッションを向ける群のほうが、平均値が5%水準で有意に高かった。強迫性パッションの得点についても、5%水準で有意な差がみられ ($F(8, 494) = 4.04$, $p < .05$)、Tukey HSD法の多重比較の結果、「仕事／学業」や「対人関係」にパッションを向ける群よりも、「受身的余暇」にパッションを向ける群のほうが、平均値が5%水準で有意に高く、「仕事／学業」にパッションを向ける群よりも、「読書」にパッションを向ける群のほうが、平均値が5%水準で有意に高かった。

一部の活動と比較して、「集団スポーツ」、「芸術」、「対人関係」といった能動的な要素が大きい活動は、調和性パッションが高く、「受身的余暇」や「読書」といった受動的な要素が大きい活動は、強迫性パッションが高かった。調和性パッションは、活動へのパッションがその人のアイデンティティに自律的に内在化されることで生じ、強迫性パッションは、活動へのパッションがその人のアイデンティティに他律的に内在化されることで生じる (Marsh et al., 2013)。自律的内在化に影響を与える要因としては、自律性支援、組織的支援、課題の自律性などがある (Vallerand, 2015)。すなわち、能動的な要素が大きい活動においては、その人の自律性を促すような周囲からの支援があったり、チームや

組織の中で適切な評価をされたり、課題に取り組む際の方法や手順を自分で自由に決められたりすることで、パッションが自律的に内在化され、調和性パッションが高くなったと考えられる。

一方、受動的な要素が大きい活動においては、その人の自律性を促すような周囲からの支援がなかったり、チームや組織で活動することが少なく、適切な評価をされなかったり、課題に取り組む際の方法や手順が限られていたりすることで、パッションが他律的に内在化され、強迫性パッションが高くなったと考えられる。

活動選択の性差 パッションを向ける活動について自由記述で回答を求めた活動を Vallerand et al. (2003) の分類に基づき9種類に分類した (Table 1)。それらの活動の男女差について検討した。カイ2乗検定の結果、有意な差がみられた ($\chi^2(8) = 19.623$, $p < .05$)。続いて残差分析を行った結果、パッションを向ける活動として、「集団スポーツ」と「仕事／学業」を選択する者は男性のほうが多く、女性のほうが少ないことが明らかになった。一方で、パッションを向ける活動として、「受身的余暇」を選択する者は女性のほうが多く、男性のほうが少ないことが明らかになった。

内的整合性の検討 パッション尺度日本語版の信頼性を検討するために、Chronbachの α 係数を算出した。その結果、調和性パッション ($\alpha = .80$) と強迫性パッション ($\alpha = .81$) のそれぞれの尺度の内的整合性が確認された。

基準関連妥当性の検討 パッション尺度の基準関連妥当性を検討するために、調和性パッションおよび強迫性パッションと、パッションの基準5項目、他の尺度の間で相関分析を行った。2つのパッションとパッション基準のそれぞれの項目との相関分析の結果を Table 3に、他の尺度との分析の結果を Table 4に示す。

まず、パッション基準の各項目との相関係数は、調和性パッションでは $r = .15 - .40$ でいずれも $p < .01$ 、強迫性パッションでは $r = .10 - .54$ で項目14のみ $p < .05$ で他は $p < .01$ であり、それぞれの項目に対して有意な正の相関を示していた。中国版 (Zhao et al., 2015) では、学業をパッションの対象とした調査を行い、パッション基準の各項目と2つのパッションとの間の相関係数を算出したところ、調和性パッションは $r = .32 - .62$ 、強迫性パッションでは $r = .13 - .55$ であった。調和性パッションの相関の値が、中国版の値よりも低い値となったが、Marsh et al. (2013) の調査では、2つのパッションとパッション基準のそれぞれの項目との相関係数の大きさが、活動内容によって異なるという結果が示されているため、活動内容の違いが影響した可能性がある。

さらに、調和性パッションでは、活動中のポジティブ感情 ($r = .30$, $p < .01$) と活動後のポジティブ感情 (r

Table 3
 パッション基準の基礎統計量および調和性パッション／強迫性パッションとの相関係数

項目	M	SD	N	HP	OP
パッション基準					
13. この活動に多くの時間を費やしている。 (I spend a lot of time doing this activity.)	4.70	1.93	508	.15 **	.54 **
14. この活動が好きだ。 (I like this activity.)	6.58	0.80	508	.24 **	.10 *
15. この活動は、私にとって重要である。 (This activity is important for me.)	6.18	1.09	508	.40 **	.26 **
16. この活動は、情熱をかきたてるものである。 (This activity is a passion for me.)	5.35	1.71	508	.37 **	.29 **
17. この活動は、私らしさの一部である。 (This activity is part of who I am.)	5.49	1.60	508	.39 **	.30 **

注) HP は調和性パッション, OP は強迫性パッションを示す。

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4
 各尺度の記述統計量と調和性パッション／強迫性パッションとの相関係数と偏相関係数

尺度	M	SD	N	α	HP		OP	
					r	pr^a	r	pr^a
ネガティブ感情								
活動中	2.22	1.04	504	.87	.02	-.03	.25 **	.25 **
活動後	1.56	0.76	258	.88	-.19 **	-.21 **	.03	.08
活動阻害	2.68	1.04	245	.81	.07	.02	.23 **	.22 **
ポジティブ感情								
活動中	3.89	1.03	496	.85	.30 **	.26 **	.19 **	.13 **
活動後	3.21	1.15	257	.85	.22 **	.21 **	.06	.01
活動阻害	1.64	0.78	245	.85	.06	.02	.18 **	.17 **
フロー								
挑戦	4.51	1.86	507	$r = .73^b$.33 **	.32 **	.07	.00
自信	4.70	1.19	504	.73	.43 **	.43 **	.05	-.04
没入	5.62	0.97	507	.64	.14 **	.03	.49 **	.47 **
恥	1.40	0.49	498	.94	-.05	-.10 *	.18 **	.20 **
不安	1.37	0.42	499	.82	.03	-.01	.24 **	.27 **
集中	2.21	0.73	503	.90	.15 **	.15 **	.01	-.01
抑うつ	0.66	0.46	493	.87	-.22 **	-.28 **	.20 **	.26 **
well-being	3.90	1.35	505	.85	.29 **	.32 **	-.05	-.13 **

注) HP は調和性パッション, OP は強迫性パッションを示す。 r は相関係数を, pr は偏相関係数を示す。

^a HP (OP) と各尺度の偏相関 (pr) は, OP (HP) を制御した。^b フローの下位尺度である挑戦は, 2 項目で構成されているため, 2 項目間の相関係数を算出した。

** $p < .01$, * $p < .05$

= .22, $p < .01$), フローのうち, 挑戦 ($r = .33, p < .01$), 自信 ($r = .43, p < .01$), 没入 ($r = .14, p < .01$), 集中 ($r = .15, p < .01$), well-being ($r = .29, p < .01$) との間にそれぞれ有意な正の相関を示していた。

また, 活動後のネガティブ感情 ($r = -.19, p < .01$), 抑うつ ($r = -.22, p < .01$) との間にそれぞれ有意な負の相関がみられた。強迫性パッションについては, 活動中のネガティブ感情 ($r = .25, p < .01$) と阻害時

のネガティブ感情 ($r = .23, p < .01$), 恥 ($r = .18, p < .01$), 不安 ($r = .24, p < .01$), 抑うつ ($r = .20, p < .01$) との間にそれぞれ有意な正の相関を示していた。

しかし、強迫性パッションと活動中のポジティブ感情 ($r = .19, p < .01$), 阻害時のポジティブ感情 ($r = .18, p < .01$), フローの下位尺度の内、没入 ($r = .49, p < .01$) に関しては、予想と異なる結果となった。

まず、強迫性パッションと活動中のポジティブ感情が正の相関を示していたことについて、先行研究では、ゲームに対するパッションにおいて、強迫性パッションと活動中のポジティブ感情との間に正の相関がみられたことが報告されている (Lafrenière et al., 2009)。さらに、原版 (Vallerand et al., 2003) と活動内容を比較すると、本研究では、ゲームなどを含む受身的余暇の割合が高いことが分かっている。今回の調査ではゲームを含む受身的余暇に対してパッションを向けたサンプルが多かったため、強迫性パッションが活動中のポジティブ感情と正の相関を示した可能性がある。そこで、受身的余暇にパッションを向けたサンプルと、それ以外の活動にパッションを向けたサンプルによる、強迫性パッションとポジティブ感情との間の相関係数を算出した。すると、受身的余暇にパッションを向けたサンプルにおいて、有意な正の相関 ($r = .40, p < .01$) が示されたが、それ以外の活動にパッションを向けたサンプルでは、有意な相関が示されなかった ($r = .10, ns$)。この結果から、本研究のサンプルで強迫性パッションと活動時のポジティブ感情が正の相関を示したことには、受身的余暇にパッションを向けたサンプルが多かったことが影響していたと考えられる。

強迫性パッションと阻害時のポジティブ感情が正の相関を示したことについては、先行研究でも指摘されていない。ここでは、正の相関を示した理由として、強迫性パッションによって引き起こされる活動状態にはネガティブ感情が伴っており、活動が阻害されたことで、安心などのポジティブ感情が高まったのではないかと考えられる。パッションの違いによって生じる感情状態の質の違いについては、先行研究でも、強迫性パッションはプライドなどの自己関連のポジティブ感情の高さと関連していることが指摘されている (Vallerand et al., 2008)。2つのパッションで生じる感情状態の質の違いがあるため、活動が阻害されることで生じたポジティブ感情は、調和性パッションの高さと関連を示しているポジティブ感情と質的に違う可能性がある。日本語版 PANAS (佐藤・安田, 2001) は、ポジティブ感情を1因子で測定する尺度であるため、感情を詳細に測定することができなかった。今後は多面的に感情を評価する尺度を使用することで、2つのパッションによって生じるポジティブ感情の質の違いを明らかにすることが可能になると考えられる。

また、強迫性パッションは、フローの下位尺度の内、没入の高さと関連を示していた。これは、強迫性パッションと没入が、ともに統制を失った状態であるという特徴が共通するため、関連を示したのではないかと考えられる。先行研究でも、強迫性パッションが、フローの下位尺度の内、統制力の低さと関連していることが報告されている (Mageau et al., 2005)。また、本研究では、強迫性パッションは、フローの下位尺度の内、挑戦 ($r = .00$) と自信 ($r = -.05$) に関しては無相関を示しており、フローのすべての下位尺度と相関を示していなかった。このことから、強迫性パッションが関連したのは、フローという概念の統制力に関わる部分のみであり、強迫性パッションが適応的な活動状態と関連を示しているわけではないと考えられる。

強迫性パッションで、阻害時のポジティブ感情、活動中のポジティブ感情、没入に関して、予想していなかった正の相関関係が認められたが、他の変数との相関は予想と一致するものであった。このことより、十分な基準関連妥当性が確認されたと判断した。

研究 2

研究2では、パッション尺度日本語版の再検査信頼性について検討した。3週間間隔の質問紙調査を行い、2時点間の級内相関係数を算出し、再検査信頼性を検討した。

方法

参加者 国立大学の大学生に3週間間隔の質問紙調査を行った。調査回答者は、1時点目では120名、2時点目では110名であった。そのうち、両方の調査に参加し、なおかつ、パッション基準の平均値が4より大きく、1時点目と2時点目で同じ活動を記述した63名 (男性39名、女性24名、平均年齢 19.04 ± 1.47 歳) を分析対象者とした。

手続き 授業担当者の同意を得た後、授業の前後などを用いて調査を行った。2016年10月下旬に1度目の調査をし、3週間後の11月中旬に、同じ授業の調査回答者に調査を実施した。倫理的配慮として、無記名式で行い、調査時には、調査への回答は任意であること、目的や個人情報保護など研究の趣旨や守秘義務についての説明を行った。なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会による審査によって承認を受けた。

調査内容 1時点、2時点とも、研究1で作成したパッション尺度日本語版を使用した。

結果と考察

再検査信頼性を検討するため、パッション尺度日本語版の調和性パッション、強迫性パッション、パッション基準の各合計得点について2時点間の級内相関係数

(Interclass Correlation Coefficient) を算出した。結果、調和性パッション (ICC (1, 2) = .75, 95%CI = [.58, .85]), 強迫性パッション (ICC (1, 2) = .71, 95%CI = [.52, .82]), パッション基準 (ICC (1, 2) = .72, 95%CI = [.54, .83]) は十分な再検査信頼性を示していた。

総合考察

本研究では、Passion Scale (Marsh et al., 2013) の日本語版を作成し、パッション尺度日本語版の信頼性と妥当性の検討を行った。

研究 1 では、探索的因子分析によって修正版 (Marsh et al., 2013) と同じ 2 因子構造が認められ、確認的因子分析の結果、構造的側面の妥当性が確認された。さらに、パッションの二元モデルから想定される概念について、先行研究を参考に相関関係を検討した。強迫性パッションと、活動が阻害された時のポジティブ感情と活動中のポジティブ感情、フローの下位尺度である没入の高さとの関連については予想と異なる結果が示された。活動が阻害された時のポジティブ感情については、体験されるポジティブ感情の質が、調和性パッションで生じるものとは異なる可能性が示された。また、活動中のポジティブ感情については、活動内容の違いによる影響の可能性が指摘された。さらに、没入については、フローという概念の統制力に関わる部分が強迫性パッションと共通するため、関連を示したことが推測された。他の側面については予想通りの関連がみられ、パッション尺度の基準関連妥当性が確認された。また、内的整合性と研究 2 における再検査信頼性の値から、尺度の信頼性についても確認された。以上の結果から、十分な信頼性と妥当性を備えたパッション尺度日本語版が作成されたと判断した。

今後の課題として、第一に、パッションが個人の様々な適応に与える影響について検討することが挙げられる。Vallerand (2013) が指摘するように、パッションは心理的な well-being だけでなく、身体的健康や、対人関係、パフォーマンス、社会への貢献という様々な適応的側面に影響を与える。海外の先行研究では、パッションがこれらの側面に影響を及ぼすことが示されているが、我が国では未検討である。パッションが導く適応的な影響を観測するうえで、パッションがこれらの指標に与える影響を明らかにする必要がある。

第二に、どのような活動がパッションを向ける活動として選択されるか、その要因についての検討が挙げられる。本研究の結果は、欧米で行われた Vallerand et al. (2003) のカテゴリ分類の数値と比較して、パッションを向ける活動の選択に言語・文化の影響を受けている可能性がある。Vallerand (2015) は、活動の選択には、気候などの環境的な要因や、性差、文化的な要因や家族環境なども影響することを指摘している。本研究では男女差が 1 つの要因になっていることが明

らかになったが、他の要因がパッションを向ける活動の選択に対してどのような影響を与えるのか、今後より詳細に検討していく必要がある。

第三に、パッションが及ぼす感情状態について、詳細に分類した上で検討することが挙げられる。先行研究では、調和性パッションが活動中のポジティブ感情を促進し、強迫性パッションが活動中のネガティブ感情を促進することが報告されている (Rousseau & Vallerand, 2008) が、Vallerand et al. (2008) のように強迫性パッションがポジティブ感情を促進するという報告もあり、結果が一致しない。本研究では後者と同様の結果が示されたが、結果が一致しない原因の 1 つとして、パッションが影響を与える感情状態が、ポジティブ感情とネガティブ感情の二次元では十分に捉えられないことがあるのかもしれない。加えて、活動状態によっても生じる感情が異なるので、パッションと感情との関連を検討するためには、活動状態を考慮し、感情を二次元以外の前提に立って検討する必要がある。

第四に、パッションと他の変数との因果関係の検討が挙げられる。本研究は横断研究であったので、因果関係については不明である。パッションは特定の活動に対して継続的に向けられるものであり、well-being の維持に重要な概念であると考えられているため (Vallerand, 2015)、1 時点の調査では影響を測定するのに限界がある。今後は 2 時点や 3 時点での縦断調査を実施することで、パッションと他の変数との因果関係や、長期間で生じる影響についても検討が可能になると考えられる。

引用文献

- Carbonneau, N., Vallerand, R. J., Fernet, C., & Guay, F. (2008). The role of passion for teaching in intrapersonal and interpersonal outcomes. *Journal of Educational Psychology, 100*, 977-987.
- Carbonneau, N., Vallerand, R. J., & Massicotte, S. (2010). Is the practice of yoga associated with positive outcomes? The role of passion. *Journal of Positive Psychology, 5*, 452-465.
- Carpentier, J., Mageau, G., & Vallerand, R. (2012). Ruminations and flow: Why do people with a more harmonious passion experience higher well-being? *Journal of Happiness Studies, 13*, 501-518.
- Chamarro, A., Penelo, E., Fornieles, A., Oberst, U., Vallerand, R. J., & Fernández-Castro, J. (2015). Psychometric properties of the Spanish version of the Passion Scale. *Psicothema, 27*, 402-409.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The "what" and "why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry, 11*, 227-268.
- Gonçalves, G., Ramos, A. O., Ferrão, M. C., & Parreira, T. (2014). Adaptation and initial validation of the Passion Scale in a Portuguese sample. *Escritos de Psicologia,*

- 7, 19–27.
- Hatori, K., Ishimura, I., Ichimura, S., & Koganei, K. (2013). Passion among Japanese College Students: Development of the Japanese Version of the Passion Scale. *Proceedings of Global Symposium on Social Sciences*, 4, 471–480.
- 林 潔・瀧本 孝雄 (1991). Beck Depression Inventory (1978年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要 (人文・社会科学篇), 27, 43–52.
- 樋口 匡貴 (2000). 恥の構造に関する研究 社会心理学研究, 16, 103–113.
- 石村 郁夫 (2014). フロー体験の促進要因とその肯定的機能に関する心理学的研究 風間書房
- Lafrenière, M. A. K., Vallerand, R. J., Donahue, E. G., & Lavigne, G. L. (2009). On the costs and benefits of gaming: The role of passion. *CyberPsychology & Behavior*, 12, 285–290.
- Lavigne, G., & Forest, J. (2012). Passion at work and burn-out: A two-study test of the mediating role of flow experiences. *European Journal of Work*, 21, 518–546.
- Mageau, G. A., Vallerand, R. J., Rousseau, F. L., Ratelle, C. F., & Provencher, P. J. (2005). Passion and gambling: Investigating the divergent affective and cognitive consequences of gambling. *Journal of Applied Social Psychology*, 35, 100–118.
- Marsh, H. W., Vallerand, R. J., Lafrenière, M. A. K., Parker, P., Morin, A. J., Carbonneau, N., ... Guay, F. (2013). Passion: Does one scale fit all? Construct validity of two-factor passion scale and psychometric invariance over different activities and languages. *Psychological Assessment*, 25, 796–809.
- 大石 繁宏 (2009). 幸せを科学する——心理学からわかったこと—— 新曜社
- Philippe, F. L., Vallerand, R. J., & Lavigne, G. L. (2009). Passion does make a difference in people's lives: A look at well-being in passionate and non-passionate individuals. *Applied Psychology: Health and Well-Being*, 1, 3–22.
- Ratelle, C. F., Carbonneau, N., Vallerand, R. J., & Mageau, G. (2013). Passion in the romantic sphere: A look at relational outcomes. *Motivation and Emotion*, 37, 106–120.
- Ratelle, C. F., Vallerand, R. J., Mageau, G. A., Rousseau, F. L., & Provencher, P. (2004). When passion leads to problematic outcomes: A look at gambling. *Journal of Gambling Studies*, 20, 105–119.
- Rousseau, F. L., & Vallerand, R. J. (2008). An examination of the relationship between passion and subjective well-being in older adults. *International Journal of Aging & Human Development*, 66, 195–211.
- Rousseau, F. L., Vallerand, R. J., Ratelle, C. F., Mageau, G. A., & Provencher, P. J. (2002). Passion and gambling: On the validation of the Gambling Passion Scale (GPS). *Journal of Gambling Studies*, 18, 45–66.
- 佐藤 徳・安田 朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, 9, 138–139.
- 清水 秀美・今柴 国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, 29, 348–353.
- Stenseng, F., Rise, J., & Kraft, P. (2011). The dark side of leisure: Obsessive passion and its covariates and outcomes. *Leisure Studies*, 30, 49–62.
- Stoeber, J., Harvey, M., Ward, J. A., & Childs, J. H. (2011). Passion, craving, and affect in online gaming: Predicting how gamers feel when playing and when prevented from playing. *Personality and Individual Differences*, 51, 991–995.
- 寺崎 正治・岸本 陽一・古賀 愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350–356.
- Vallerand, R. J. (2010). On passion for life activities: The dualistic model of passion. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 42, pp. 97–193). New York: Academic Press.
- Vallerand, R. J. (2013). Passion and optimal functioning in society: A eudaimonic perspective. In A. S. Waterman (Ed.), *The best within us: Positive psychology perspectives on eudaimonia* (pp. 183–206). Washington, DC: American Psychological Association.
- Vallerand, R. J. (2015). *The psychology of passion: A dualistic model*. New York: Oxford University Press.
- Vallerand, R. J., Blanchard, C., Mageau, G. A., Koestner, R., Ratelle, C., Léonard, M., ... Marsolais, J. (2003). Les passions de l'âme: On obsessive and harmonious passion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 756–767.
- Vallerand, R. J., & Houliort, N. (2003). Passion at work: Toward a new conceptualization. In S. W. Gilliland, D. D. Steiner, & D. P. Skarlicki (Eds.), *Emerging perspectives on values in organizations, information* (pp. 175–204). Greenwich, CT: Information Age Publishing.
- Vallerand, R. J., Ntoumanis, N., Philippe, F. L., Lavigne, G. L., Carbonneau, N., Bonneville, A., ... Maliha, G. (2008). On passion and sports fans: A look at football. *Journal of Sports Sciences*, 26, 1279–1293.
- Zhao, Y., St-Louis, A., & Vallerand, R. J. (2015). On the Validation of the Passion Scale in Chinese. *Psychology of Well-Being*, 5, 1–11.
- Zito, M., & Colombo, L. (2017). The Italian version of the Passion for Work Scale: First psychometric evaluations. *Revista de Psicología Del Trabajo Y de Las Organizaciones*, 33, 47–53.